

吉田城さんの思い出

宇佐美 齊 Hitoshi USAMI

吉田城さんの思い出として真っ先に脳裏に思い浮かぶのは、私が京都大学人文科学研究所で主宰した4つの共同研究班のうちの3つに、実に十数年にわたって有力メンバーの一人として加わってもらったことである。何はおいてもまずこのことを、深い感謝の念とともに記しておかなければならない。すでに闘病生活は始まっていたから、隔週の月曜日午後に行われる例会は、しばしば城さんの透析の日と重なった。くれぐれも無理をしないでほしいとの私の願いを、いつもの変わらぬ明るい笑顔で聞き流しながら、ほとんど休みなく出席してくれた。例会は午後2時に始まって、通常は5時頃まで、時には6時頃まで続く。城さんはその日の口頭発表が終ると、いつも率先して発言を求め、ゆきとどいた講評と適切なアドバイスを私たちに惜しみなく披露してくれた。そしてしばらく議論に加わったあと4時をまわった頃になると、私たちが15分ほどの中休みをとろうとするころあいを見計らうかのように、静かに席を立てて足早に病院へと向かうのであった。

もちろん彼自身の口頭発表に際して遺漏のあろうはずはなかった。周到な準備と綿密な考証を経て作成された資料（例えば年譜一つをとってみても、既成のものを借用するのではなく、たいていは手問ひまかけて作ったお手製のものであった）は、すでに城さんの頭のなかで論文がほぼ8割がた仕上がっていることを物語っていた。いつも感心させられたのは、該博な知識がこれ見よがしに羅列されるのではなく、あくまでも明晰な論理のふるいにつけられよく整理されていて、要点がきわめてシャープな形で提示されていることであった。ただでさえフランス語学フランス文学科の主任教授として、教室の運営、講義、そして院生学部生の指導は言うにおよばず、数度にわたる国際シンポジウムの主宰や、旺盛な論文の執筆や翻訳活動などで多忙をきわめるなかで、厳しい闘病生活のあいまをかいくぐるようにしてなされた、このような献身的な協力を思い返すと、それが城さんの命をけずる過酷な犠牲の一部をなしたのではないのか、との自責の念に苛まれずにはいられない。

言い訳になることを承知のうえで言えば、しかし生前の吉田城さんは周囲にそうした懸念を微塵も感じさせないひとだった。ごくまれに透析の副作用で身体の節々がいたみ夜もよく眠れないと打ち明けることがあっても、聞く者の精神的負担を最小限にするような無意識の配慮と、つねに前向きにものごとを考

えるあの持ち前の向日性とによって、実に明るくさらりとそのことが言われるのであった。人はいつになっても病気を飼いならすことなど出来はしないのであろうが、ひとたび逃れることがかなわないと分かった場合、その病氣といかに向き合い日常的にどうつきあっていったらいいのか、私などはおそらくじたばたするばかりで途方に暮れるほかはないのではないかと不安であるのに、城さんから私たちが見せてもらったのは、実に見事な作法と叡智の見本であったように思われてならないのである。思えば彼は、早くから自分の余命を知りつくして、それを最大限に充実させることの出来た人であった。

城さんに加わってもらった最初の共同研究は、サンボリズムを対象に選んで、文学を中心とする諸芸術の相互干渉をも視野に入れながら、これを総合的に考察することをねらいとするものだった。その成果報告書は『象徴主義の光と影』と題してミネルヴァ書房から1997年に刊行されたが、城さんはそこに「神話の変貌—フランスの作家はモローをどう見たか—」という論考を寄せてくれた。ギュスターヴ・モローの芸術理念を検証したうえで、その芸術がフロベール、ユイスマンス、ブルーストという3人の作家によってどのように受容されたかについて、勘所をおさえてあざやかに解きあかすものであった。

二つ目は、アヴァンギャルド芸術を対象とするもので、その成果報告書は、『アヴァンギャルドの世紀』と題して京都大学学術出版会から2001年に刊行された。城さんはこれに「ブルーストからポール・モランへ—新しい文学形式を求めて—」と題する35ページにおよぶ力作を寄せてくれた。城さんの研究課題の中心はもちろんブルーストであるが、この頃から彼の関心は、ブルーストと同時代の文化、たとえばロシア・バレエと文学前衛運動（コクトー、アポリネール、モラン）の関係にまで広がっていた。この論考はその成果の一端を見事に証したてるものであった。

吉田さんに加わってもらった以上二つの共同研究の問題意識は、実をいうとその前に私が主宰した「フランス・ロマン主義の研究」に端を発している。これには典子夫人の協力を得ることが出来、成果報告書『フランス・ロマン主義と現代』（1991年、筑摩書房刊）には、彼女の卓抜なアロイジウス・ベルTRAN論が掲載されている。この報告書を含めた上記三部作は、フランスを中心とするヨーロッパ近代の芸術を、主としてその表現理論の変遷に着目して、これを創造と受容の両面から考察することをねらいとしている。ロマン主義におけるミメシス（模倣再現）理論から自己表白と内面性の美学への転換、すなわち世界を映し出す「鏡」から自らが発光体となって世界を照らし出す「ランプ」への転換、象徴主義における「ほのめかし」「暗示」「喚起」などといった意思

疎通への願いをこめた表現手段の模索、あるいは作品の産出とその享受という二つの行為への反省を通して、世界との函数関係を改めて打ち立てようとする新たな試み、そしてさらには20世紀前半において芸術概念と表現理論とを大きく転換させたアヴァンギャルド芸術の提起した諸問題、こうした一連の問題意識は、近代芸術の主要な潮流を18世紀中葉から20世紀中葉にいたる一つの巨大な枠組としてとらえようとする総合的な視点をよりどころにして、旧来の狭い枠組にとらわれた文学史や芸術史を書き換えようとする意図をもったものであったが、吉田さんの仕事はこの野心的な試みにつねに有効な指針を与えつつけてくれた。

吉田城さんが参加してくれた3つ目の共同研究は、「日仏文化交渉の研究」と題して2002年4月に発足したもので、まもなく京都大学学術出版会からその成果報告書が、『日仏交感の近代—文学・美術・音楽—』と題して刊行される(2006年5月刊行の予定)。城さんはこれにも「木下杢太郎とフランス文化」と題する力のこもった論文を寄稿してくれた。彼は以前から、芥川龍之介を中心にして、大正から昭和にかけての日本文学にフランス文学や欧米の文学がどのような影響を与えたか、との比較文化比較文学の課題にも造詣が深かったが、これはそうした業績の最後を飾る力作となった。

私たちの研究班では、めいめいが口頭発表を2回ほど重ねたあと、ほぼ1年を経てから初稿を持ち寄って検討会を催すのがならわしであった。城さんは病状の悪化にもかかわらず、というよりも残された時間の僅少さにみずから気づいていたがゆえになのか、誰よりも率先してこれをきちんとした形で提出して模範を示してくれた。しかも驚いたことに、締め切りの8ヶ月も前にプリントアウトした完成原稿をフロッピー・ディスクともども私のところへ届けてくれたのであった。おそらくあらかじめ入院を覚悟して、私たちに余計な心配や迷惑をかけないようにとの配慮によるものに違いなかった。

吉田城さんは、亡くなる1ヶ月半ほどまえに病院から私の自宅へ電話をかけてくれた。少し言葉がもつれるような感じは否めなかったものの、ひところの重篤な病状からようやく脱しつつあることを報告し、あと1ヶ月もすればなんとか職場へもぼつぼつ復帰できるのではないかとの希望を、いつものように坦々と語ってくれた。「迷惑をおかけしてすみません」との私への心くばりの言葉とともに話されたその報告に胸を打たれた私は、責任感の強すぎる城さんを懸念して、「こんな時こそはしばらく仕事のことなどは忘れて、十分に静養してくださいよ」と答えることしか出来なかったのであるが。

学究という古めかしい言葉こそが似つかわしい吉田城さんではあったが、そ

の人柄は大らかで俗世間の話題にも意外と柔軟に対応のできる開かれた心の人であった。また何よりも典子夫人と二人のお子さんの家族を愛し家庭を大事にする人であった。いつだったかフランス文学会の秋季大会からの帰りに、空港ターミナルからタクシーに同乗したことがあった。車が市の中心部を抜けて洛北へ向かおうとする頃、城さんが「ちょっと失礼します」と言って、やおら携帯電話を取り出して二人のお子さんに順番にやさしく語り始めたのは、傍から見てもいかにも微笑ましい光景であった。ちょうどその頃、何かの雑談の折に、お子さんたちの通う京都市立葵小学校の校歌の作詞者が、伊吹武彦先生であることを教えてもらった。伊吹先生は京都大学と関西学院大学における私の恩師（私は修士課程を終えるとすぐに、京大を停年退官して関学に移っておられた伊吹先生の居られるフランス文学科の助手に採用された）であり、公私にわってお世話になった懐かしい旧師なので、ぜひその歌詞をいつか見せてほしいと頼んだのであった。それから間もなくして城さんから、「伊吹先生作詞の葵小学校校歌のプリントが見つかりましたのでお送り申し上げます」との端正な筆致の添え書きとともに、平成8年度の入学式の式次第と歌詞の載ったプリントが、別刷りの楽譜とともに送られて来た。校歌にありがちの銜いや気負いがなく、やさしくてとてもいい歌なので、3番までである歌詞の1番のみをここに書き写しておくことをお許し願いたい。

葵の花の	うすむらさきに
夢もむらさき	ほのぼのにおう
夢ははるかに	望は高く
自由にのびる	わたしらほくら

城さんも二人のお子さんと一緒に、この歌を口ずさむことがあったらどうか。吉田城さん、長い間、人に倍する誠意と熱意とをもって私どもの共同研究班に協力してくださってありがとう。そして今こそは安らかにお眠りください。

[2006年3月25日、京都大学人文科学研究所を定年退職する日を目前にして。]

(うさみ・ひとし 京都大学名誉教授)